



「カレーライスを一から作る」 96分



カレー一杯、命いっぱい。

探検家・関野吉晴は、武蔵野美術大学で一風変わった課外ゼミ活動をしている。通称「関野ゼミ」。そんな関野が2015年に始めたのが、「カレーライスを一から作ってみる」という試み。野菜や米、肉、スパイスなどの材料をすべて一から育てるというこの途方もない計画に、学生たちと取り組んだ。この映画は、種植えからカレーライスが出来上がるまでの9か月間の記録である。

「トマト帝国」 70分

南仏プロヴァンス。ある日、慣れ親しんできたトマト工場が中国資本に買収され、原料が中国から輸入された青いプラスチック容器に入った濃縮トマトになっていた。中国に飛んだ監督は、新疆ウイグル自治区の広大な農場で栽培される加工用トマトに出会う。

あまりトマトを食べない中国が、なぜトマトを作り濃縮加工までして輸出するのか。そこに浮かび上がってきたからくりとは…。現代の世界的なトマト産業の現状が明らかになる。トマト缶の生産と流通の裏側を暴き、フランスで最も権威あるジャーナリズム賞「アルベール・ロンドル賞」を受賞した書籍『トマト缶の黒い真実』をドキュメンタリー化。

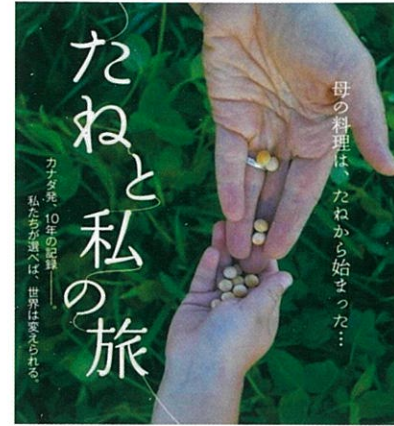


映画の

あらすじ



「たねと私の旅 私たちが選べば、世界は変えられる」 87分



米国やカナダに遺伝子組み換えの表示義務がないことを疑問に感じた一人のカナダ人女性が、その謎を解こうとする。彼女の名前はオリブ。彼女の母親は食に関心が高く、毎年自ら採った種をまき、野菜を育て、子どもたちに自分たちが食べているものの背景を知る大切さを教えていた。19歳で実家を出て、初めて店で食材を選ぶようになったとき、食料品店で売られる出自のわからない食品に戸惑ってしまう。なぜ、遺伝子組み換え食品に表示義務がないのか…。答えを求め、オリブは旅にでる。取材開始から10年の歳月を経て、見えてきた真実とは。

「山懐に抱かれて」 103分

岩手県の山あいで、酪農を営む大家族の24年を追ったドキュメンタリー。岩手県下閉伊郡田野畑村で5男2女と夫婦の9人で暮らす吉塚さん一家。父の公雄は「みんなが幸せになる、おいしい牛乳をつくりたい」との思いから、牛を完全放牧し、限りなく自然に近い環境で、草だけを餌に牛を育てる安心安全の「山地酪農」を実践。プレハブの家でのランプ生活、大自然を駆け回り牛の世話をする子どもたち、父と成長した子どもたちとの衝突、仲間たちとともに挑んだプライベートブランド設立、第二牧場への夢など、実現困難を極める酪農に挑んだ家族たちが歩んできた24年を丹念に追っていく。ナレーションを、吉塚一家の牛乳を永年愛飲しているという女優の室井滋さんが務める。



タイムテーブル

9:00~	カレーライスを一から作る 96分
10:50~	トマト帝国 70分
12:00~	お昼休み
12:50~	講演: 結城登美雄先生
13:45~	たねと私の旅 87分
15:20~	山懐に抱かれて 103分
17:10	上映終了(予定)



講演 — 結城登美雄先生

昭和20年 旧満州(中国東北部)生まれ。民俗研究家で、現在 東北大学大学院非常勤講師。15年にわたり東北の農山漁村をフィールドワークにしながら、住民を主体にした地域づくりの手法「地元学」を提唱。出版界、演劇界、学者、研究者、建築家などとネットワークしながら、宮城県内及び東北各地で地域おこしの活動を行っている。宮城県宮崎町(現加美町)の「食の文化祭」や、北上町(現石巻市)の「宮城食育の里づくり」ではアドバイザー、旧鳴子町「鳴子の米プロジェクト」の総合プロデューサーをつとめた。雑誌や新聞を中心に農と地域づくりについて執筆中。「芸術選奨 芸術振興部門 文部科学大臣賞」(平成16年度)「第61回 河北文化賞」(平成23年度)等受賞。

映画祭への思い

この映画祭は、単に有機農業や食の安全といった内容にとどまらず、人と自然との関係性やそれを支える価値観、社会のあり方といったところまで視野を広げ、“人間の本当の豊かさとは何か”を感じてもらうことを目的に開催するものです。ドキュメンタリー部門で高い評価を受ける4作品を取り揃えました。日本の地域社会や日常の食卓の“今”、そして命の尊さが見事に描かれており、きっと皆様の心に大きな共感と深い感銘を与えてくれるものと思います。慌ただしく過ぎる毎日の中、ふと足を止めて映画をご覧いただき、心に吹き込んでくる感動を是非味わっていただきたいと思います。

国際有機農業映画祭in久住 実行委員会一同